のぞましさ述語と有利さ述語

大久保　朝　憲

1．はじめに

日本語では，鱗翅目に属するコンチュウには「チョウ」と「ガ」があるが，両者は分類学上明白に区別することはできないとされている。いっぽうで，日本語話者の言語感覚は両者をはっきりと区別する。

（1）　チョウがたくさんいたよ。かわいかった。
（2）　ガがたくさんいたよ。きもちわるかった。
（3）　チョウがたくさんいたよ。きもちわるかった。
（4）　ガがたくさんいたよ。かわいかった。

（1）-（4）の発話には文法的な問題はなく，意味内容の理解に前後の文脈が特に必要になることもない。しかし，「より自然な発話のながれは」ととわれれば，（1），（2）が「普通」の発話であるのに対して，（3）については，たとえば「へえ，チョウがきらいなんだね」，（4）については「へえ，ガがすきなんだね」などのように当該発話による述定の意味的有標性についてのコメントが生じやすいことが直観的に観察される。両者の生物学的区別が専門的な見地からは不可能であるいっぽうで，言語上の区別は明白である。すなわち，「チョウ」とは鱗翅目のコンチュウのうち，あかるく，陽気で，したしみをもてるもののことであり，「ガ」とは同鱗翅目のコンチュウのうち，くらく，陰気で，いみきらいたくなるもののことである。このような意味特徴は，当該のコンチュウが現実世界で属性としてもっているものではなく，「チョウ」「ガ」

という単語に，日本語話者があたえた意味でしかない。もちろん，だからといってわたしたちはアゲハチョウをみて「ガ」ということはできないし，カイコガをみて「チョウ」ということもできない。しかし，指示上の厳密な規定ができない以上，このような「指示機能」はこれらの語の本質とはいいがたく，むしろわたしたちにとっての，これらのコンチュウの「のぞましさ」がこれらの語の意味の中心にあるというべきであろう。

本稿では，このように語彙的意味に「のぞましさ」がふくまれる，あるいはふくまれうる述語となる語句が，おもに形容詞述語・名詞述語として使用される際の意味特徴を分析し，このような語句を述語とする発話が，どのようなディスコースの構築をうながすか，そしてそのことが，どのような社会言語学的問題に接続しうるかということについての分析をおこなう。基本的な理論的スタンスとして，本稿は Carel（2011，2012）の論証的意味論 la sémantique argumentative の言語観を採用する。この理論では，すべての発話の意味に論証性をみとめ，「X だから Y」，「X なのに NEG-Y」（NEG：否定）などのように記述される意味関係が，発話の意味のみならず，個々の単語の意味さえも構成しているとかんがえる[1)]。したがって，本稿では，冒頭の鱗翅目コンチュウの例についても，「あかるい」「くらい」「陽気」「陰気」といた印象が，それぞれのコンチュウにステレオタイプ的に外部からはりついているのではなく，こうした性質こそが，「チョウ」「ガ」の意味であるとかんがえ，それによって（1）-（4）のような発話が可能となるとかんがえる。

本稿は，以下の手順で議論をすすめる。まず本節につづく 2 節では，大久保（2016）で論じた「のぞましさ」が意味的にふくまれる述語に観察される「規範的偏向」の概念をあらためて導入し，本稿の分析上の重要概念である「のぞましさ述語」について説明する。つづく 3 節では，一見のぞましさ述語のようにみえるもののなかには，規範的偏向の性質をもたないものがあり，これを「有利さ述語」として独自の意味的性質をもつものとして規定する。以上の理論的道具だてを導入したうえで，4 節では，「黒人」・black という語に，「の

ぞましさ」述語としての用法と，「有利さ」述語としての用法がそれぞれ可能であることをしめす。両者はそれぞれ，抑圧のディスコース，抵抗のディスコースを構築し，おなじ語句が，ディスコースを，黒人差別を容認する方向にも，それに抵抗する方向にもむかわせるちからをもつことをみる。そして5節では，「黒人」・black について前節で観察したことが，ほかの語彙についても確認できる例として，性的少数者の蔑称，女性標示語を検討し，のぞましさ述語とは別に，有利さ述語を設定する理論的有効性を確認する。最後の結論では，2つの異なるディスコースをみちびく述語として，「のぞましさ述語」・「有利さ述語」がはたすやくわりの一般性について確認し，今後検討すべき課題を提示する。

2．「のぞましさ」にかかわる評価述語とその規範的偏向

本節ではまず，大久保（2016）で論じた評価的発話の規範的偏向をみなおし，本稿での議論にみあう修正をおこなう。

2.1.　規範的評価述語（＝のぞましさ述語）と中立的評価述語

大久保（前掲書：1.1.）では，「X は Y だ」（Y：形容詞／名詞述語）という述定形式の発話を，X についての話者の評価をつたえる「評価的発話」と，X について話者が事実とみなすことがらを確認するものとしてのべられた「確認的発話」とに区別し，両者を簡易に区別する手段として，その発話への反応として「わたしもそうおもう」という応答ができるかどうかというテストに依拠することを提案した（同書：314）。以下にそれぞれの典型的な例をしめす。

（5）　チョウはかわいいけど，ガはきもちわるい。〔評価的発話〕
（6）　このクロアゲハ，おおきいね。〔評価的発話〕
（7）　ネットでしらべたけど，日本最大のガはヨナグニサンだ。〔確認的発話〕

すぐにわかるように,「わたしもそうおもう」テストは（5),（6）はパスするが,（7）では通常容認されない。

つぎに,（5),（6）のタイプの評価的発話を，大久保（前掲書：1.2.）では，述語の語彙的意味に「のぞましさ」がふくまれているかどうかによって「規範的評価発話」と「中立的評価発話」に下位分類し，それぞれの述語を「規範的評価述語」「中立的評価述語」とした。前者には「よい／わるい」,「うつくしい／きたない」,「正直／うそつき」などの対義語ペアがふくまれ，前者の語彙的意味には，それがあらわす意味が規範的に「のぞましい」ことであることがふくまれており，後者には「のぞましくない」ことがふくまれている[2)]。

（8） うつくしい風景をみて，よい気分になった。
（9） うつくしい風景をみて，暗澹たる気分になった。

（8）は，この発話を構成する要素だけで自然にその意味が了解されるが,（9）の発話を解釈するためには，文脈のサポートが必要になる。

以上の「規範的評価述語」に対して,「中立的評価述語」には,「のぞましさ」属性が語彙的意味にふくまれておらず,「ながい／みじかい」「たかい／ひくい」「おおい／すくない」のように，それだけでは規範的評価をみちびかない述語がこれにあたる。「その橋はながい／みじかい」といったところで，それだけでは，橋のながさ／みじかさがのぞましいのかどうかはわからない。ほかの例についても同様である[3)]。

本稿では,「規範的評価述語」を，直観的なわかりやすさを考慮して,「のぞましさ述語」とよびかえることにする。「中立的評価述語」については，あとでのべるように，その一部は「有利さ述語」となる[4)]。

2.2. のぞましさ述語の対義語ペアにおける意味的偏向

大久保（2016）が述語をこのように 2 分類したのは，否定におけるふるまい

の明白なちがいが観察されたことであった。これは Ducrot（1973：125）の以下のような指摘を精緻化したものである。

「反意関係の形容詞のペアをつくる２語に対して，否定は対称的なふるまいをみせない。『やさしい／いじわるい』というペアをかんがえてみよう。『ピエールはやさしくない』という発話は，しばしば『ピエールはいじわるい』に非常にちかい。これに対し，『ピエールはいじわるくない』は『ピエールはやさしい』に等価というにはほどとおい。」

Ducrot（前掲書）では，このような意味的偏向が，どのような形容詞において生じるかについての詳細はしるされていないが，大久保（前掲書）では，この偏向が，のぞましさ述語の対義語ペアに限定されることをあきらかにした。すなわち，否定によって反意語の意味にちかづくのは，のぞましさ述語のペアの優位の（のぞましい）意味をもつものだけで，中立的評価述語のペアにおいては，たとえ文脈のサポートによって規範性をになわされたばあいでも，同様の偏向は生じない。以上のことをうらづけた大久保（前掲書：318 一部修正）の例を再掲する。

(10)　**のぞましさ述語の対義語ペア**

a．??そのレストランは，おいしくないが，まずくもない。

b．そのレストランは，まずくないが，おいしくもない[5)]。

(11)　**中立的評価述語の対義語ペア（文脈の影響をうけないケース）**

a．その川は，ながくないが，みじかくもない。

b．その川は，みじかくないが，ながくもない。

(12) **中立的評価述語の対義語ペア（文脈で規範的評価発話となるケース）**

a．そのみちのりは，ながくないが，みじかくもないので，そこそこつかれる。

b．そのみちのりは，みじかくないが，ながくもないので，そこまでつかれない。

「おいしくない」がほぼ「まずい」を含意することは，日常の言語直観からもしられ，「おいしくない」が「おいしい」と「まずい」の中間段階を意味しにくいことが，(10a) の不自然さによってうらづけられる。他方，(10b) 以降，文脈の支援でのぞましさ発話になる (12) もふくめ，いずれも中間段階が想定されることで発話の不自然さは観察されない。

以上から，大久保（前掲書）では，意味的偏向が生じるのは，のぞましさ述語の対義語ペアのうち優位評価述語（のぞましさ優位述語）の否定のみと結論づけ，このような意味的偏向を，「規範的偏向」となづけた[6)]。ところが，その後の調査により，状況はもうすこし複雑であることがわかった。

3．有利さ述語

3.1．「かねもち」はのぞましさ述語か

これまでの調査で，上記にみた規範的偏向は英語やフランス語などにも観察される，一般性のたかい現象であることがわかっている。規範的偏向は，「のぞましい」事態についてのある種の「完全主義」が，一般的に共有されていることによると推測される。食事が「おいしい」のは，調理されたものの素材の新鮮さ，あじつけ，温度，くちあたりなど，さまざまな要素がのぞましい状態におかれることによって成立するもので，そのうちの要素がひとつでものぞましくなければ，料理全体がのぞましくないもの，つまり「まずい」ものになってしまう。「うつくしい」田園風景は，農道のみちばたにころがったあきかん

１つで，そののぞましさを喪失し，風景全体が「きたない」ものになってしまう。もっと端的な例をあげれば，「善人」とよばれるひとは，たったいちど，ちいさな悪事に手をそめただけで，即座に「悪人」よばわりされる可能性があるが，「悪人」としてしられる人物が，２つ３つの善行をつんだぐらいで，すぐに「善人」になれるわけではないのだ。

ところが，一見したところ，いまのべたようなのぞましさ述語のペアにみえるものが，規範的偏向をしめさない事例がある。説明の都合上，英語の例をさきに検討する。

(13)　a．Paul is not rich. ≠ Paul is poor.
　　b．Pau is not poor. ≠ Paul is rich.
　　c．Paul is not rich but he is not poor, either.

rich/poor という対義語のペアは，一見したところ，本稿でいうのぞましさ述語であるようにおもわれるが，これらの語は，すくなくとも上記（13）の例に関しては，のぞましさ述語がもつ意味的偏向の性質をもたない。かりに rich/poor がのぞましさ述語だとすると，優位評価述語は rich，劣位評価述語は poor になることは直観的にしられるが，（13a）にみられるように Paul is not rich の意味は，かならずしも Paul is poor の意味への偏向をみせない。そこから，のぞましさ述語では不可能なはずの（13c）の発話も容認可能となる。

しかし，rich/poor はつねにこのような意味的ふるまいをみせるわけではない。（13）の例は，人間が主語になり，その人物が経済的に富裕である，すなわち「かねもち」であるか「貧乏」であるかという意味で解釈され，そのばあいには規範的偏向は観察されなかった。他方，この対義語ペア rich/poor には，経済的富裕さではなく，より一般的な「ゆたかさ」「とぼしさ」の意味がある。特に土壌が，そこで農業をおこなうのに適切かどうか，つまりその土地の土壌がいかに富裕な栄養分にめぐまれているかどうかの評価にも使用される。そし

てそのばあい，rich/poor は，規範的偏向の性質をもつことになる。(14) を参照されたい。

(14) a．The soil is not rich in this region. ≈ The soil is poor in this region.
b．The soil is not poor in this region. ≠ The soil is rich in this region.
c．??The soil is not rich in this region, but it is not poor, either.

つまり，評価述語としての用法を考慮するかぎりにおいて，rich/poor には，のぞましさ述語としての用法とそうでないものがあるということになる。日本語では，この 2 つの rich，2 つの poor を表現する語を区別し，経済的な rich/poor は「かねもち」・「貧乏」，より一般的なものには「ゆたか」・「とぼしい」などが使用され，それぞれ規範的偏向に関するふるまいにちがいがある。

(15) a．タロウはかねもちではない。≠タロウは貧乏だ。
b．タロウは貧乏ではない。≠タロウはかねもちだ。
c．タロウはかねもちではないが，貧乏でもない。

(13) の英語の例でもみたように，「かねもちでない」ことは，即座に貧困を意味するわけではなく，そのあいだには「中間層」があることをわたしたちはしっており，それは (15c) によって発話としてもなりたつことがしられ，(15a, b) から「かねもち」／「貧乏」はのぞましさ述語がもつ偏向をもたない中立的評価述語であると判断される。

では，「ゆたか」／「とぼしい」のばあいはどうだろうか。

(16) a．このあたりは自然がゆたかではない。≈このあたりは自然にとぼしい。
b．このあたりは自然がとぼしくはない。≠このあたりは自然がゆたかだ。
c．??このあたりは自然がゆたかではないが，とぼしくもない。

以上のように，「ゆたか」／「とぼしい」には規範的偏向が観察され，これらはのぞましさ発話を構成する述語になるとかんがえることができる。

以上のことは何をしめしているのだろうか。このことをかんがえるために，日本語では，この２つの意味を両方もっている，英語の rich/poor のような語がないということがヒントになる。経済的富裕さと，それ以外の一般的ゆたかさは，日本語のように区別して概念化することができる。その際，経済的富裕さをめぐる「かねもち」「貧乏」などの語は，一見「かねもち」を優位とし，「貧乏」を劣位とするのぞましさ述語のようにみえるが，そうではないことは，本稿が依拠する規範的偏向を性質としてもたないことからも，また，よくかんがえてみると直観的にもしられることである。経済的な富裕さは，それだけで「のぞましさ」をもたらすものではなく，「のぞましさ」の到達への「手段」をあたえるものである。同様に，経済的な貧困は，「清貧」のような語にもみられるように，そのこと自体で「のぞましくない」事態ではないが，それによって，ばあいによっては「のぞましさ」への到達手段の一切を剥奪される状況にある。これらに対して，「自然がゆたかである」ことは，「のぞましさ」への手段ではなく，「のぞましさ」そのものであり，「自然がとぼしい」ことは，「のぞましくない」事態そのものである。したがって，「ゆたか」／「とぼしい」はのぞましさ述語として機能できるのである。

3.2.　有利さ述語

それでは，経済的富裕さが「のぞましさ」と直結しない以上，これらはのぞましさ述語ではなく，「ながい」／「みじかい」のような中立的評価述語とおなじものとかんがえてよいのだろうか。大久保（2016）では，のぞましさ述語の輪郭を明示化するために，それ以外の述語をふくむ発話を中立的評価発話と一括したが，事態の評価のしかたには，ほかにもさまざまなものがあるとかんがえることができる。それらの「評価タイプ」のようなものを網羅するのは本稿

の力量にあまるこころみとなるが，中立的評価述語のなかでも，のぞましさ述語とみまがいそうなものを，それとして区別し，規定しておくことには一定の意義があるとかんがえる。そこで，うえにみた「かねもち」／「貧乏」タイプの評価述語を，「有利さ述語」となづけ，それを述語とする発話を「有利さ述語発話」とよぶことにする。「有利さ」とは功利性のことであり，それ自体が目的（のぞましさ）ではなく「他の目的の実現に役立つもの」となるような評価のことであり，それが有利であるかどうかは，しばしば文脈の支援によって決定する。「かねもち」／「貧乏」の例はしたがってむしろ例外的に，文脈を必要とせず「有利さ」にかかわる属性が語彙化したものということができる。そこには，貨幣経済にもとづく資本主義的価値観が通底しており，「よのなかおかね」「かねがあったらなんでもできる」といった，功利的なディスコースによって，このような意味が言語普遍的に共有されている[7)]。

有利さ述語のほかの例として「高学歴（だ）」をあげることができる。学歴のたかさは，知的能力を社会的にうらづけるものではあり，知的能力そのものを意味する「あたまがいい」のような述語は，規範的偏向（「あたまがよくない」→「愚鈍」）をしめす，のぞましさ述語である。つまり「あたまがいい」ことは，言語的にはそれだけで「のぞましい」ことであるということである。これに対して，「高学歴」は，当該人物の知的能力そのものに言及するため以上に，対社会的な「スペック」として言及されることがおおい。

以上をいいかえれば，のぞましさ述語は，そうであることで「どんないいことがあるのか」という問いが生じない「それ自体としてののぞましさ」を意味にふくむものであるが，有利さ述語には，おなじ問いがなげかけられうるものである。

(17)　a．田中はあたまがいいから，その問題にもかならずこたえをみつけてくれるよ。

　　b．??田中は高学歴だから，その問題にもかならずこたえをみつけてく

れるよ。

c．佐藤はあたまがいいから，一流企業に就職できた。

d．佐藤は高学歴だから，一流企業に就職できた。

学歴のたかさは，履歴書的な事実であり，言語上，知的能力のたかさを推論させることはあっても，それを直接含意するものではないので（17b）は不自然になる。（17c）には疑問符を付さなかったが，就職活動という社会的活動との親和性がたかいのは「高学歴」であるという観察が妥当であれば，（17c）には，「あたまがいいから，圧迫面接のきりぬけかたにも知恵をはたらかせて」といった情報の補充を期待したくなるところである。

4．評価述語としての２つの「黒人」概念

4.1．のぞましさ述語としての「黒人」・「白人」

「X は Y だ」という形式で事態 X を評価する評価述語には，ほかにもさまざまなタイプがあることが推察されるが，そちらの可能性については別稿にゆずることにして，本節では，のぞましさ述語と有利さ述語の関係について議論をふかめる。そこでまず，「黒人」・「白人」もしくは black/white という人種概念上の対義語ペアをトピックとして，もともとのぞましさ述語とみなされていた語を，有利さ述語ととらえなおし，それがディスコースのながれを転換する契機となりうることについて論じる。

本節で問題にしたいのは，すでに大久保（2016，2018）でも部分的に論じた，「黒人」・black という述語である。皮膚のいろにより分類される「人種」の概念には，科学的な根拠もなく，むしろ人種主義を政治的に利用するためのイデオロギー的概念といって過言ではない。バラク・オバマ氏が米国の大統領であったとき，日本語でも英語でも，メディアでは以下の（18）のように，氏を「黒人大統領」と表現するディスコースにあふれた。

（18） Yes, Barack Obama was the first black president – but he didn't improve the lives of black Americans.[8)]

大久保（2018）では，これを批判し，以下のように論じた。

「よくしられているとおり，オバマ氏はケニア出身者の「黒人」の父親と，カンザス州出身の「白人」の母親とのあいだにうまれた「混血」であり，その意味でかれは black ではなく，同じ意味で white でもない。あるいはまた，かれのことを black といえるのであれば，同等の意味で white と形容することも可能であるはずである。」

にもかかわらず，（18）のような例をいくらでもみつけることができるのは，

「合衆国の人種差別の歴史のなかで，白人性の純粋主義にもとづく「一滴規定 One–drop rule」によるものであるとかんがえられる。この「一滴規定」とは，サブサハラ・アフリカ系の祖先がひとりでもいれば（黒人の血が「一滴」でもながれていれば），その人物は黒人 negro とみなされるという法的な人種分類の原則のことである。」

（大久保 前掲書：19）

オバマ氏を「黒人大統領」と表現することに躊躇が感じられないのは，こうした表現をふくむディスコースが，「黒人でないからといって即座に白人であるというわけではないが，白人でなければ黒人である」という，一滴規定に動機づけられた信念にもとづいているためであることがわかる。そしてこの信念は，人種概念としての black/white という対義語ペアを，のぞましさ述語のペアであるとみなすのと同様のもので，実際，このペアは規範的偏向の性質をおびていることが即座に確認できる。オバマ氏の「混血性」を考慮すれば，以下

の（19），（20）の発話はどちらも容認されるはずであるが，通常の文脈は「一滴規定」にしたがい，（20）を排除する。そして（21）が容認されるということは，white がもつ規範的偏向をうらづけることになり，オバマ氏を black president と表現することが可能となるのは，まさにこの規範的偏向により，not white, then black とする信念が一般性をもつことによるのだ。

（19） Obama is not black, but he is not white, either.
（20） ??Obama is not white, but he is not black, either.
（21） Obama is not white, that is, he is black.

大久保（2016）の議論は以上を指摘したところでおわっているが，大久保（2018：19）では，上記の分析の視点に矛盾する以下のような事実が，統計資料をもとに報告されている。

> 「ピュー研究所 Pew Research Center の調査によると，オバマ氏を black と表現するアメリカ人は27%，mixed–race と表現するひとは52%にのぼった。また，オバマ氏を black と表現する白人は24%，ヒスパニック系では23%にとどまっていたのに対し，黒人の55%がオバマ氏を black とするという結果がでていた。」

つまり，前項で，劣位ののぞましさ述語と分析された「黒人」・black の語をこのんで使用するのは，主として当事者の黒人であるという調査結果である。これについて，大久保（前掲書）では，ここでは「black が「合衆国大統領」のような名誉ある職位にかかる形容詞であることがまずはおおきい」といった，この個別のケースについてのばあたり的な説明しかできなかった。これに対して本稿では，「黒人」・「白人」もしくは black/white という対義語ペアは，さきにみたように，規範的偏向を意図的に設定したことによってのぞましさ述

語としての使用が一般化しているが，そのいっぽうで，有利さ述語としてもきわめて一般的に使用されることをあらたに指摘したい。

4.2.　有利さ述語としての「黒人」・「白人」

すでにみたように，有利さ述語とは，のぞましさ述語とは似て非なる述語で，後者が「それ自体としてののぞましさ」にかかわるものであるのに対して，前者は「他の目的の実現に役立つもの」という観点から，そのために有利なもの，不利なものといった意味をふくむ述語のことである。のぞましさ述語としての「黒人」・「白人」は，これをめぐる規範的偏向にうらづけられるように，「黒人」が劣位，「白人」が優位の評価語となり，人種差別的なディスコースの再生産の資源となるものである。かりにこれを（18）にあてはめれば，“the first black president”における black の意味は「おとった人種」となり，「はじめてのおとった人種の大統領」という，きわめて人種主義的発話がなされていることになるが，オバマを black と表現する当事者55％が，このような意味構造をうけいれているとはかんがえがたい。ここではむしろ black が有利さ述語として使用され，「不利なたちばにおかれた人種」のような意味を充当するのが適切であろう（対する white は「有利なたちばにおかれた人種」となる）。有利・不利は，それ自体でのぞましさをもたらすものではなく，つねになんらかの目的の達成や，希望の実現に関して有利・不利な事態である。このようにかんがえると，black は，たとえば「自己実現のために不利なたちばにおかれた人種の大統領」といった解釈をみちびき，このように「万難を排した」イメージは，被抑圧層としての黒人の共感をよびうるものとなるので，前記した調査結果とも矛盾なく関連づけられるものとなる。

以上のことから，つぎのようにいうことができる。ここでみた人種についての述語のように，評価述語には，のぞましさ述語，有利さ述語のように，文脈や話者の意図に応じて，ちがう意味特徴をもったものとして使用しわけられることがある。いっぽうは，規範的偏向をともない，ある種権威主義的なのぞま

しさ（優位性・劣位性）を表現するディスコースを先導し，後者はそのような「のぞましさ」（「白人であることはのぞましく，黒人であることはのぞましくない」）を排し，自己実現のための状況の「有利さ」「不利さ」の観点（「白人であることは有利で，黒人であることは不利である」）を導入する。

black をめぐる事例を，あと 2 例，簡単に考察する。1 例めは，2020年 8 月，女子テニスで黒人男性銃撃事件への抗議のため，ウエスタン・アンド・サザン・オープン準決勝の棄権を公表した大坂なおみ氏のツイッター投稿の一部である。

(22)　Before I am a athlete, I am a black woman.[9)]

大坂氏は，日本人とハイチ人の「混血」という点で，彼女にとっては，のぞましさ述語としての解釈（「白人でなければ黒人」）を経由して，有利さ述語としての black を自身のアイデンティティとしてうけいれている。この発話では，「自己実現のために不利なたちばにおかれた人種」が，（トップ）アスリートとしてのはれやかなそれにさきだって，自身のアイデンティティであることが宣言されており，事件の被害者，ひいては，ここでの意味でのすべての black との連帯を表明していることが理解できる。

2 例めは，カリフォルニア州選出の上院議員で，2020年 8 月に，2020年アメリカ合衆国大統領選挙におけるジョー・バイデン陣営の副大統領候補に選出されたカマラ・ハリス氏についての論評記事からの引用である。

(23)　And yet for years, she has primarily been identified as a Black woman in the public eye, with her South Asian identity rarely mentioned in media coverage until fairly recently[10)].

ハリス氏もまた，インド人の母親とジャマイカ人の父親をもつ「混血」で，彼

女が black を自称する意図は，大坂氏同様，被抑圧者として不利なたちばにおかれた非白人種との連帯であることがうかがわれるが，他方この記事をふくむいくつかのメディアでは，彼女は，自身の南アジア系というアイデンティティをあまりつよくはしめさないことが批判されている。black は，しばしばいわれるように，そして本稿の規範的偏向（白人でなければ黒人）にみられるように「非白人」のすべてのひととの連帯を表現しうる語であるいっぽうで，アフロ・アメリカ人に限定された用法もあり，その両者間のゆれが批判の対象になっているとおもわれる。

4.3.　抑圧と抵抗の 2 つのディスコース

これまでみてきたように，「黒人」・「白人」という概念は，きわめて両義的に使用されている。この節の最初にのべたように，これらの概念に科学的な根拠をもとめることは不可能であるが，にもかかわらずそこに白人至上主義をもちこんだ「一滴規定」により，「黒人」・「白人」概念は，のぞましさ述語として理不尽なかたちのまま，法的根拠さえ獲得することになった。このような差別的な意味規定をうけとめつつ，「白人であることののぞましさ」「黒人であることののぞましくなさ」を「白人であることの有利さ」「黒人であることの不利さ」ととらえなおしたのが，主として当事者によってひきうけられた，有利さ述語としての「黒人」・「白人」である。したがって，これら 2 つの「黒人」・「白人」概念は，それぞれ別の種類のディスコースを形成する。いっぽうで，白人の人種的優位性と黒人の劣位性を前提とする「抑圧」のディスコースが生産されつづけ，他方で白人の社会的有利さと黒人の不利さを前提とし，しばしばその打開をめざす「抵抗」のディスコースが展開されることになる。意味論的矛盾にもかかわらず，オバマを積極的に「黒人大統領」と表現するとき，その「黒人」の使用は，こうして抵抗のディスコースの構築につながるものとなるのである。

さらに，本稿では詳述しないが，「黒人」・black が，「抵抗」のディスコー

スによって当事者によって積極的に使用され，やがて「不利さ」とたたかう人種コミュニティによって「名誉」「誇り」のディスコースへと展開している。1960年代の「ブラック・パワー運動 black power movement」などがその証左といえるだろう[11)]。

ただし，「黒人」を使用することで，話者が抑圧・抵抗どちらの（あるいはそれ以外のどの）ディスコースにのっとった発話をしているかをしることはかならずしも容易なことではない。オバマ氏を the first black president と述定するとき，それが規範的偏向によるのぞましさ発話として「劣位の人種」の大統領に言及しているのか，有利さ述語発話として，「不利な人種」が，抵抗により万難を排してそうなった大統領に言及しているのかを峻別する必要がある。

5．マイノリティをひきうけるディスコース

ここまで，「黒人」・「白人」の概念をめぐり，これをのぞましさ述語ととらえるばあいと，有利さ述語ととらえるばあいで，それぞれ抑圧と抵抗のディスコースの構築がうながされることをみてきた。ここで，「黒人」・「白人」のような対義語ペアとして規範的偏向基準を適用することができないものの，その使用実態から「のぞましさ」と「有利さ」尺度の交替を観察することができるその他の事例について論じたい。

5.1.　性的少数者の蔑称

性的少数者を総括する呼称として，近年一般化し，定着した用語として LGBT があるが，そのバリエーションのひとつとして，もっとも広範囲の非異性愛的性的志向を総括するものが LGBTQ＋ としてしられている。このなかの Q とは「クィア queer」のことであり，この英単語は，現在でも「奇妙な」「風がわりな」といった意味で一般的にも使用される形容詞に由来する。当初は主として男性の同性愛者一般に対する蔑称として使用されていたが，次第に

当事者たちによって，自身のさまざまな性的志向を自称する際にも使用されるようになり，現在は，LGBT の分類にあてはまらないさまざまな性的志向のありかたとみなされている。queer の対義語を，かりに語義によりそって ordinary とすれば，否定のテストから，この対義語ペアについては一応規範的偏向が観察され（not ordinary ≈ queer, not queer ≠ ordinary）[12]，queer は劣位ののぞましさ述語の（のぞましくない）属性を表現するとみなすことができる。そして「黒人」同様に，この劣位評価述語は，ディスコースレベルでは，その地位にとどまらず，有利さ述語として再解釈され，「（性的志向のために）不利なたちばにおかれている」という意味をつたえることになり，当初この語がもつ意味にもかかわらず，クィア当事者の連帯をうながす抵抗のディスコースをみちびくこととなる。以下の引用（24）は，クィアの団体 Queer Nation のマニフェスト集からのものであるが，queer の語がもちうる抑圧と抵抗のディスコースがわかりやすくよみこまれたものとなっている。

（24） Well, yes, “gay” is great. It has its place. But when a lot of lesbians and gay men wake up in the morning we feel angry and disgusted, not gay. So we’ve chosen to call ourselves queer. Using “queer” is a way of reminding us how we are perceived by the rest of the world. It’s a way of telling ourselves we don’t have to be witty and charming people who keep our lives discreet and marginalized in the straight world. We use queer as gay men loving lesbians and lesbians loving being queer. Queer, unlike GAY, doesn’t mean MALE. And when spoken to other gays and lesbians it’s a way of suggesting we close ranks, and forget (temporarily) our individual differences because we face a more insidious common enemy. Yeah, QUEER can be a rough word but it is also a sly and ironic weapon we can steal from the homophobe’s hands and use against him.

（“Queer Read This”（https://actupny.org/documents/QueersReadThis.pdf））

これと多少比較しうるところのある日本語の表現に「おかま」がある。こちらは，説明するまでもなく，男性の同性愛者一般を意味する古典的な蔑称である。対義概念は「男性の異性愛者」となるが，俗称ということもあり，「おかま」にみあう対義語を設定することはできず，規範的偏向のテストにもかからない例ではあるが，こうした語は，蔑称であるという点で，劣位ののぞましさ述語であるとみなすことができるだろう。ところが，よくいわれるように，このような蔑称は，非当事者が当事者にむかって使用すれば蔑称となるが，当事者どうし，もしくは当事者が非当事者にむかって自称として使用するばあいはかならずしも蔑称とはならない[13)]。劣位ののぞましさ述語は，これまでみてきたように，「のぞましさ」のディスコースから「有利さ」のディスコースにに移行することで，「のぞましくない」存在から「不利なたちばにおかれている」存在としての性質をもつことになる。そのことは当事者間の連帯をうながし，当事者から非当事者にむけては抵抗のディスコースとなる。これに対して，非当事者が当事者にむかってこの語を使用することは，当該話者の真意とは無関係に，蔑称としての機能がはたらき，「抑圧」のディスコースをうながす可能性がある。そのために非当事者には，「おかま」の蔑称性をかっこにいれた当事者間用法的な使用は困難なのである。

5.2.　女性標示語

この節で論じる「女性標示語」とは，「女性宇宙飛行士」，「女社長」，「女医」，「女子従業員」などにみられるように，主として職業名に，当該人物が女性であることをしめすために冠される接頭辞的要素のことである。これに対応する男性標示語（「男性～」「男～」など）も，存在するものの，概して使用頻度がひくく，このことから，職業名については男性が無標，女性が有標であると判断され，フェミニズム言語学で批判される「人間＝男」観を，これもまた反映

したものであるということになる[14)]。たとえば，さまざまな日用品・道具類などには「こども用自転車」「こども用あまがさ」などのように「こども」の使用者を想定していることが明示されているものがある。これは，「自転車」や「あまがさ」が，デフォルトでは「おとな用」であり，このようにして世界は基本的に「おとな」のためにできていることをあらわしている。だからこそ，「おとな用」とわざわざ表記されているものをみかけることはまれで，「おとな用」「こども用」の対立では，おおくのばあい，前者が無標項，後者が有標項であることが容易にしられる。これと同様に，職業名に女性標示語が頻繁にみられ，男性標示語がすくないとすれば，ここでもやはり後者が無標，前者が有標であることを意味し，「女性宇宙飛行士」を例にとると，これは「女性であるのにもかかわらず宇宙飛行士」であるという意味あいで，女性宇宙飛行士の有標性を表現していることになる。そしてこのことは，日本語においても女性を「職業人となる能力に欠けた劣位の性」とし，だからこそ，希有なことに宇宙飛行士となった当該人物の性別に言及する，というのが，フェミニズム言語学の文脈で指摘されることである。

さて，「女性」の対義語は「男性」だが，これらの語は「うつくしい」・「きたない」，「正直」・「うそつき」などのような対義関係にあるのではなく[15)]，否定に規範的偏向があるかどうかを確認するテストにもなじまない。しかしながら，フェミニズム言語学の批判的考察にしたがえば，「女性」「おんな」「女（ジョ）」「女子」が，被修飾語に有標性をもたらすという点から，これらが劣位の評価述語であることはあきらかである。それでは，その劣位性（有標性）は「のぞましさ」の点でそうなのか，それとも「有利さ」の点でそうなのか。つまり，「女性宇宙飛行士」とは，「のぞましくない性別の宇宙飛行士」なのか，「不利な性別の宇宙飛行士」なのかという問題である。本来はコーパスの調査にもとづいた議論が必要だが，いくつかの例を考察するだけでもいえることは，どちらのケースもみられるということである。たとえば (25) の「女性宇宙飛行士」は，女性としての記録を「塗り替え」，「宇宙科学における女性の地

位向上」についてかんがえている。そして，先人の「女性宇宙飛行士」たちの「勇気に満ちた挑戦が……引き継がれた結果として今がある」といったディスコースのながれをみても，ここでは「女性宇宙飛行士」の有標性は，おとった，のぞましくない性別ではなく，さまざまな不利な状況をのりこえてきた性別としてみられていることはあきらかである。

(25)　今年２月，ある女性宇宙飛行士が，女性の宇宙滞在記録を塗り替えた。クリスティーナ・コックだ。地球に帰還してリハビリ中の彼女に，宇宙での新たなる発見や宇宙科学における女性の地位向上，そして，宇宙探査が人類にもたらす恩恵について話を聞いた。（中略）アウタースペースでの微小重力を専門に研究している彼女を突き動かしてきたのは，宇宙飛行士として時代を切り拓いてきた女性たちの存在がある。1963年に女性として初めて宇宙飛行を経験したロシア人の宇宙飛行士，ワレンチナ・テレシコワや，1983年にアメリカ人女性として初めて宇宙に行ったサリー・ライドなどだ。彼女たちの勇気に満ちた挑戦がコックのような後進に引き継がれた結果として今があることを，私たちは忘れてはいけない。[16]」

また，以下の (26) は，女性の起業家がめだって増加している事実を論じたウェブマガジンからのものであるが，ここでも「けん引する」「奮闘ぶり」「壁の乗り越え方」など，「女性」の有標性は，のぞましさにおける劣位ではなく，有利さ・不利さのスケール上の下位（不利さ）をしめしているようにおもわれる。

(26)　女性社長はこの８年で２倍に増加。けん引するのは doors 世代。独自の技術やビジネスモデルでグローバルな成長を目指しています。そんな doors 世代起業家の奮闘ぶり，壁の乗り越え方は多くの人に参考になるはず。ご期待ください！[17]

これらに対して，以下の（27），（28）の「女社長」「女子アナ」はどうだろうか。「社長」とは当然会社組織の長をあらわす役職名であるが，（27）では「キレイで仕事もできる」と，社長本来の能力は二の次にし，容姿を優先させるみかたとなっており，すくなくとも，不利な状況を克服した性別についてのとらえかたとはいいがたい。（28）も同様で，当該アナウンサーの，アナウンサー業務とは無関係の特徴が，「愛され力」という，アナウンサーにとってはやはり非本質的な属性に収斂させられており，「アナウンサー」を放送員としての能力において正当に評価する視点をもった発話とはいいがたい。

（27）【美人社長ランキング】キレイで仕事もデキる！女社長5人をランキングしてみた[18)]

（28）“キワドイ発言”もお手の物？ “かわいすぎる”フリー女子アナ新井恵理那の「愛され力」とは？[19)]

以上の観察からいえることは，職業名の接頭辞として付される「女」「女性」「女子」などの女性標示語は，その有標性だけによって規範的劣位を標示する接頭辞といいきることはできないということだ。女性標示語を付与することで，「女性であるにもかかわらず……である」というタイプのディスコースが構築されることにまちがいはないが，これには，「女性のくせに」「女だてらに」と，女性を能力のおとった，「のぞましくない性」とする性別観をベースにするものと，「女性という不利な状況におかれていたにもかかわらず」と，女性が，自己実現の機会を剥奪されてきた，「不利な性」とする性別観をベースにするものがある。フェミニズム社会学の論点からは，こうした2つの，抑圧と抵抗のディスコースの存在に十分な注意がはらわれず，これらを一括して差別的表現として，メディアでの使用を禁じるべきであるという主張もあるが（上野/メディアの中の性差別を考える会，1996など）そのような主張を一概にみとめるわけにもいかないことがあきらかになったのではないだろうか。

ただし，上記接頭辞の使用が，抑圧と抵抗の２つのディスコースを構築しうるという事実をもって，安易にこれを容認してしまうことの危険にも注意がはらわれなければならない。つまり現実には，「人間＝男」観の賛同者として，有標項指示のための女性標示語を使用しているにもかかわらず，おもてむきにはそれに対する抵抗のディスコース構築をこころみているのだ，とうそぶく態度である。フェミニズム社会学が批判しているのは，まさにその点で，たしかに，女性標示語は２種類のディスコースをみちびくかもしれないが，抵抗のディスコースをよそおった抑圧のディスコースが展開するおそれがあるかぎり，これに対しては批判的でなければならない，あるいはすくなくとも個別のケースを慎重に判断する必要があるだろう。

６．結論にかえて

本稿では，「のぞましさ」にかかわる対義語ペアが，規範的偏向をヒントに，「黒人」・「白人」，black/white が，のぞましさ述語として「よい」・「わるい」，「うつくしい」・「きたない」とおなじような意味的ふるまいをし，「黒人」・black が劣位の，のぞましさ述語とみなされることで，抑圧のディスコース構築に加担するものであることを確認した。そのいっぽうで，black の語を当事者である黒人が積極的に使用する現実を再検討し，「黒人」・black が「のぞましさ」ではなく，「有利さ」にかかわる述語として認識しなおされることで，劣位の有利さ述語として，抵抗のディスコース構築に利用されることもわかった。本稿ではくわしく論じなかったが，これに近似した事実は nigger のような明白な差別語においても観察される。差別語としてあからさまな，のぞましさ評価発話内で，劣位の「のぞましくない人種」としてあつかわれるいっぽうで，おなじ語は，当事者間でしたしみをこめた「連帯」の呼称として使用されることもあり，このとき，劣位ののぞましさ述語は，有利さ述語として，抵抗のディスコースを構築する契機となるのだ。規範的偏向テストの適用外にはなるが，同様のケースは，ほかにも性的少数者を意味する「クィア」，「おかま」

などの語についても観察され，フェミニズム言語学で批判される女性標示語についても，それらが，のぞましさ述語として抑圧のディスコース（「女のくせに」）を構築するのか，有利さ述語として抵抗のディスコース（「女であることで課せられたハンディをのりこえて」）を構築するのかという二者択一性があることが確認できた。このようにして，バラク・オバマ氏を「黒人」と特徴づけることの両義性と，女性標示語をめぐる両義性の問題が，本稿の提案する理論的道具だてによって接続されたということもできるだろう。

本稿の紙幅では論をつくすことができなかった問題は多数あるが，そのもっともおおきなもののひとつは，おなじ単語の使用が，いかにして抑圧のディスコースから抵抗のディスコースへのシフトを可能にするのかというものである。「クィア」の語の積極的使用をめぐって提示のみした，(24) の引用の最後の部分が，この問題をかんがえるうえで示唆的かもしれない。ひきつづき調査と分析をすすめたい。

> Yeah, QUEER can be a rough word but it is also a sly and ironic weapon we can steal from the homophobe's hands and use against him.
> （そう，クィアというのは，乱暴なことばかもしれないが，それはまた，わたしたちが同性愛嫌悪者の手からうばってかれらに対抗できるような，巧妙でアイロニカルな武器でもあるのだ。）

注

1）本稿で論じる内容の一部には，すでに大久保（2016），大久保（2018）で論じた内容がふくまれる。前者については，「規範的偏向」の概念が本稿においても重要なものであることにより，後者については，あつかう現象が共通しているが，本稿では「のぞましさ」概念にくわえて，「有利さ」という操作概念を導入することで，未解決だった問題の解決をこころみるものとする。論証意味論については，大久保（2016：3.1.）に，その基本的なかんがえかたを概説した。

2）言語研究における「のぞましさ」の概念については，語彙的意味にふくまれるのぞましさ以上に，構文や接続表現などがもたらす，発話内容に対する話者の主観性表現として

の「のぞましさ」，つまりモダリティ研究の文脈で論じられた「のぞましさ」研究にすぐれたものがあるが（阿部（2019），赤塚（1998）などを参照），本稿では，この用語をそのまま語彙的のぞましさについて使用することにする。

3）ここであげた中立的評価述語について，「おおきいことはいいことだ」的なディスコースにのっとって，「みじかい」より「ながい」，「ひくい」より「たかい」，「すくない」より「おおい」のほうが「のぞましい」ケースが統計的におおい，という事実はあるかもしれない。しかし，あとでみるように，のぞましさ述語と中立的評価述語には，その否定において決定的なちがいがあり，かりにそのような統計的事実がしめされたとしても，言語的事実がそれによって影響をうけることはない。

4）ほかにも独自の呼称をもうけたほうがよいものもあるかもしれないが，現段階では，規範的偏向をもたない対義語ペアのうち，有利さ述語をのぞいたものを中立的評価述語とよびつづけることにする。

5）狭義の意味論的観点からは「おいしくないが，まずくもない」と「まずくないが，おいしくもない」は同値であるので，ここでの判断に疑義がさしはさまれるかもしれない。しかし，自然言語では論理的同値性とはすこしちがう解釈プロセスとなる。「おいしくないが，まずくもない」では，「おいしくない」（≈「まずい」）が発話されると同時に，いわば「ほぼまずい」の意味が発動するので，そこで「まずくない」といいつらねるのは不自然になる。他方「まずくないが，おいしくもない」では，「まずくない」（≠「おいしい」）が発話されたからといって「ほぼおいしい」の意味は発動しないので，そこで「おいしくもない」と発話することに不自然さが感じられることはないのだ。

6）アイロニー研究における Wilson（2014）で，アイロニーの用例の意味的かたよりについていわれる normative bias の語を日本語訳し，大久保（2016）より援用している。

7）もちろん，恐慌などで資本主義経済が危機におちいり，貨幣の所有が富をもたらさなくなったような状況が恒常化したり，原始共産制社会がいとなまれ，そもそも貨幣が「のぞましさ」到達の手段とならないような状況では「かねもち」の功利性は消失することになるだろう。

8）http://www.independent.co.uk/voices/barack-obama-donald-trump-us-presidency-black-lives-matter-hurricane-katrina-a7413416.html

9）https://twitter.com/naomiosaka/status/1298785716487548928/photo/1
（a athlete は原文のまま）

10）https://www.vox.com/identities/2020/8/14/21366307/kamala-harris-black-south-asian-indian-identity

11）アメリカ黒人の呼称とその意味の変遷については藤本（1998）にくわしい。

12）とはいえ，これはあくまでも queer の一般的な意味としてこのような観察が可能なだけで，ここでいう queer は，ordinary とのあいだの中間段階をみとめない概念かもしれず，

あるいはこのような対義語の設定そのものが不適切かもしれない。そのばあいは，（つぎにみる「おかま」同様）規範的偏向のテストになじまないものとなる。

13）これと平行した事実が，黒人に対するもっとも軽蔑的な呼称である nigger についても観察されている。「黒人に対する最も差別的，侮蔑的な言葉はこの nigger である。（中略）しかし，この語が差別的，侮蔑的な意味を持つのは，白人が黒人に対して使うときであり，黒人同士の間では親しみを込めてお互いを呼び合うのに使われているのが興味深い。」（藤本 1998：97）

14）フェミニズム言語学についての基本的な理念については，中村（1995），中村（2001）にくわしい。また女性標示語の詳細な分類については，徐（2013），女性標示語の政治的不公正については，上野/メディアの中の性差別を考える会（編）（1996）を参照のこと。

15）このことは，「男性」「女性」が矛盾関係にある（中間段階をみとめない）ことをしめしているのだろうか。「あまり男性ではない」「大変女性である」といった程度表現が容認されないかぎり，現代の日本語では，性が二分法的にとらえられているとみとめざるをえない。

16）https://www.vogue.co.jp/change/article/women-change-the-world-christina-koch-cnihub

17）https://doors.nikkei.com/atcl/feature/19/122600053/011600002/
引用中の「doors 世代」とは20～30代の女性のこと。

18）https://onnashachou-hyakka.hatenablog.com/entry/2019/12/27/%E3%80%90%E5%A5%B3%E7%A4%BE%E9%95%B7%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%AD%E3%83%B3%E3%82%B0%E3%80%91TBA%E3%80%8CToshio_Bijin_shachou_Award%E3%80%8D%EF%BD%9EMK5%E2%80%94%E3%83%9E%E3%82%B8%E3%81%A7
（個人ブログ）

19）https://gendai.ismedia.jp/articles/-/73960?imp=0

参考文献

Carel, Marion.（2011）*L'Entrelacement argumentatif. Lexique, discours et blocs sémantiques*. Paris: Éditions Honoré Champion.

Carel, Marion.（2012）Introduction. Marion Carel.（ed.）*Argumentation et polyphonie. De Saint-Augustin à Robbe-Grillet,* pp. 7-58. Paris: L'Harmattan,.

Wilson, Deidre.（2014）"Irony, hyperbole, jokes and banter" in J. Blochowiak, C. Grisot, S. Durrleman-Tame, C. Laenzlinger（eds.）, *Papers dedicated to Jacques Moeschler*, Genève.

阿部宏（2019）「矛盾文と「望ましさ」主観性について」，澤田治美・仁田義雄・山梨正明編『場面と主体性・主観性』（ひつじ研究叢書〈言語編〉第148巻），271-293. ひつじ書房.

赤塚紀子・坪本篤朗〔共著〕/中右実〔編〕（1998），『モダリティと発話行為』（日英語比較選書３），研究社.

上野千鶴子/メディアの中の性差別を考える会（編）（1996），『きっと変えられる性差別語――私たちのガイドライン』，三省堂.

大久保朝憲（2016）「評価述語の規範的偏向とアイロニー」，『關西大學文學論集』66(3)，313-345,

大久保朝憲（2018）「語彙的評価語の否定における規範的偏向：“Barack Obama is the first black president of the US”の両義性をめぐって」，『日本語用論学会　第20回大会発表論文集　第13号』17-24.

徐微潔（2013）「日本語における女性標示語「女子から」」，『日本語と日本文学』55，22-37. 筑波大学国語国文学会.

中村桃子（1995）『ことばとフェミニズム』，勁草書房.

中村桃子（2001）『ことばとジェンダー』，勁草書房.

藤本規夫（1998）「アメリカ黒人の呼称について」，『広島文教女子大学紀要』33，95-101.